

## 小学校における言語教育活動の活性化 ー英語活動を主眼として活動を進めるー

鬼丸晴美（明星中学高等学校 教諭）

### ■ 研究の背景と研究の目的

言語教育の大きな役目は言語を使いこなせるように導いていくこと、つまり4技能の流暢さ(fluency)と正確さ(accuracy)であると考えている。加えて「聴く、話す、読む、書く、考える」と自然な活動が言語教育の要であると考える。言葉の持つ魅力、通じた時の喜び、コミュニケーションから生まれる大きな世界観を得るなどといった計り知れない人生への影響力がある。世界のパスポートといわれる英語から世界観を共有していくよう、母語と同様に絵本など単語数の少ない洋書を楽しみながらの「英語多読」の実践経験から市民公開講座を開講すると、参加者の半数以上が小学生親子であった。絵本の楽しさにCD音声の口真似をし始め、美しい英語の発音に周りの大人が驚かされた。小学校教育でも導入できたらよいのにとの声は参加者誰もが思うこととなった。小学校教育現場における言語学習としての「英語多読」展開が有効であろうと考えた。本研究は一小学校が学校を上げて取り組む体制が整い、全教員が共同研究者として子どもたちの教育活動に積極的に関わろうとする条件を満たし、2020年小学校の英語科導入に先駆け教育効果の拡大が見込める有意義な研究であると考えた。また、小学校の英語科授業開始においては教育者の質の保障も要求される。学級担任が日々の教育活動な中でも英語教育活動を推進し高品質な授業展開を提供できるよう研鑽を全教員で進めていけるのも本研究の大きな目的である。

### ■ 研究方法

実際に英語授業展開に向けてハード面とソフト面の準備が必要となる

準備1：英語圏の子どもたちが言葉を構築していくために使用されている音声付きの英語の本を収集する。

準備2：スピーカフォン・コンパクトCDプレイヤー・仕訳ボックスなどの準備

準備3：English Library 解説に向けての準備

準備4：Reading sheet作成・マスターCD保護のため複製に対する許諾申請

準備5：学級担任主導の英語教育活動展開に向けて模擬授業にて研修を積む

実践1：低中高学年3ブロック制の分科会・全体会で研修をし、2つの発表会に向けて共同研究者全員で研鑽を積む。

実践2：校内研究授業をする。ブロックにて話し合い→選書→模擬授業→素案作成→模擬授業→指導案作成→研究授業

実践3：日本多読学会（2014年8月3日）にて実践授業DVD公開と実践報告

実践4：府中市教育委員会研究協力校・研究発表会（2015年2月6日）にて11クラスが英語授業公開

English Library の公開・研究発表会低中高3ブロックの研究報告プレゼンテーション

講演「信頼関係が育む小学校の英語教育」

博報財団第9回児童教育実践についての研究助成事業 研究代表 明星中学高等学校教諭 鬼丸晴美

### ■ 結果・成果

英語授業累計回数 1年生-16回、2年生-15回、3年生-21回、4年生-21回、5年生-36~37回、6年生-37回

(1年生から3年生までは担任授業、4年生は10時間、5・6年生は25時間ALTとチームティーチング)

電子黒板利用 ICT 英語授業を実施。外部講師（ネイティブ）による授業など年間を通して企画。府中市立小中学校教育研究会で英語授業を公開。保護者英語ボランティアによる昼休み英語読み聞かせ実施。全米小学校使用のe-bookを全家庭に配信。

上記研究方法に記した実践をこなしていく中で英語の授業を楽しみに待つ児童の姿が見られた。英語授業に消極的であった4月とは見違えるほど学級担任が児童と英語授業を楽しむ姿が見られた。集大成として各学年が指導案を作り上げた。それぞれの先生方がPDCAサイクルで教育実践にあたった。当初の研究目的は十二分に達成されたと実感する。

### ■ 今後の課題

現行の教育課程で「外国語活動」という言葉は5・6・年生で示されている。1年から4年生には位置づけがない。時代の要請はあるが公立小学校では追いついていない面がある。全学年で英語学習の実践躬行を文字化しづらい面があった。小学校外国語活動の位置づけが進まないと現場でのストレスが生じる。また、本研究で使用のコンパクトCDプレイヤーはすでに生産が終了した。研究後半ではe-bookやICT英語学習を推進し先生方に講評であった。今後はリソース導入を検討し、使いこなせるところから活字へとシフトするという新しい流れの検討や変更不可欠であろう。

共同研究者 東京都 府中市立府中第一小学校 全教職員33名

子どもたちと、未来のあいだに